

## 中島川水辺の表情(九) 三つのほほえみ

古屋 陸夫

めがね橋から中島川を上流に向かうと、桃溪橋という由緒ある石橋があり、その手前に「宮の下」という小公園がある。そこでの事、一人の幼児がちよこちよこと走りまわり遊んでいる。西洋系の二歳位の可愛い女の子、金髪がくるくると巻き毛で瞳がパッチリ。このような幼児をフランス人形みたいというのであろう。私のごとき老年の男をみても臆することなく、ほほえんでいる。私の同年位の孫娘は、近寄ると、とつと逃げ出すか、切羽詰まると泣き出してしまふ。かなりの格差、文化の違いか？

ちよつと離れた所に、お父さんらしき外国人の青年がいる。当然であろう、幼児一人で見知らぬ長崎に来るわけもない。体格のすつきりとしたなかなかの好青年。みていると、やにわに携帯電話を手に話し出した。聞いていると、是れはこれは、流暢な日本語である。親しみが湧く、近くに掛かっている上着をみると、スリッダイヤのマーク付き仕事着。

いま長崎は客船ブーム、入港する客船もだが、三菱重工では建造する客船も数年は続くという。三菱マークをつけた青年に話し掛ける。「香焼ですか」「はいそうです」と、ほほえんでいる。客船は香焼工場で建造している。双眸は至って優しい。



「あじさいとめがね橋」

「日本語がとて上手ですね」「いいえいいえ、とんでもない謙遜している。顔が健康そうな色艶で輝いている。「日本に来て何年ですか」「四年になります」成程、四年になればこんなに上手になるのか、と改めて感慨をいだいた。お国はどこだろう？英国か

## 伊沢蘭軒の長崎遊学

新名 規明

森鷗外の長編史伝『伊沢蘭軒』の主人公・伊沢蘭軒は、文化3年(1806)から翌年まで、長崎に遊学している。長崎奉行・曲淵和泉守の一行に随行し、文化3年7月6日に長崎に到着した。そして、翌年の9月頃まで滞在した。このことは鷗外著『蘭軒』(略称)に記されているところである。



『蘭軒』(その五十三)でその名が出てくる胡兆新は、蘇州出身の医者で書にも優れていた。毎月二・七の日に聖福寺や崇福寺で長崎の人々に医療を施していたことが、金井俊行編『増補長崎畧史』に記されている。張秋琴は唐船の船主で学問にも造詣が深かった。蘭

### 風信

- 七月と言えば「七夕」に始まる。旧記によると「丸山の七夕」は実に賑かであつたと言う。
- 次いで全国的には七月十三日より「お盆」と記してあるが、長崎地方では戦後昭和二十七年より「お盆」は八月十三日よりとなっている。
- 七月二十二日より二十四日まで「ギオン様」(八坂神社祭礼)。ホウズキ店が多くありましたが、今はどうでしょうか。
- 七月二十三日の夜は(昭和五七年)長崎大水害の日でした。死者二六二人、中島川に架る多くの文化財の石橋が流され、本会のある建物の一階事務所も水にあふれました。
- この二十三日、私達は夕方より二十四日昼まで飯香浦地蔵盆見学に行く予定でしたが夕方より雨、それで中止・私達一同よかったです。：多分、お地蔵様の「お告げ」があつたのでありましよう…
- 飯香浦地蔵盆は市無形文化財で、上・下の地蔵堂あり。ソーメン飾り、鉦の音に合わせたの初夜・後夜の念佛会等あり、一度は参加させて戴くと良い思い出となります。

米国か、まさかフランスではあるまい。いつも予想は外れるのでそう思った。聞いてみよう「お国はどこですか」「オランダです」うーん。米、英、中国などと比べると、やはり珍しい。世界の地図上ではかなり遠い。もう一つの課題に突き当たった。あの幼児はどちらの国の言葉を使うのだろうか？すぐにその機会がきた。「おとうさん、スベリ台にのりたいたい」幼児が青年に問い掛ける、歴とした日本語。フランス人形みたいな幼児の口から日本語が飛び出した。私は面白くも爽やかに受け留める。属地主義という言葉もあり、郷に入れば郷に従えというのもある。幼児の回りはみんな日本語であろう。幼児はスベリ台に向かう、スベリ台は高い台座に登らなければならない。まだ覚束無い、幼児にはちよつと危ない。青年はあわてて駆け寄り、手を差し伸べる「○○○、○○○！」多分、危ないよ！といったのであろう。このように危険に対する咄嗟の発言は、母国語であつた。そうかそうかと納得。

折から、二〇メートル先より、若い女性がこちらにやってくるのがみえた。髪あくまで長く、すらりとした日本人である。私の近くに立ち、スベリ台の二人をみている。「奥さんですか」出で立ちは普段着、中島川近辺に居住しているのであろう、女性はほほえんで「はい、そうです」明るく応える。詰まり国際結婚というわけだ。そこでおまけに、「御主人は、なかなかよい男ですね！」「ハンサムなどという言い方はしない。女性は否定も肯定もせず、さらに嬉しそうに、にこやかにほほえんだ。ここで日本女性の奥床しさを感取った。

(九州文学同人・本会協力会員)

軒は張に清朝考証学について、質問している。

鷗外は医学史家の富士川游より、蘭軒自筆の「長崎紀行」や「蘭軒詩集」を借用して、叙述を進める。蘭軒が長崎滞在中に交際した長崎人は、石崎融思(御用絵師)、徳見訥堂(長崎宿老)、劉大基(唐通事)、向井元仲(聖堂祭酒)など。このうち、劉大基(彭城仁左衛門)は崇福寺後山の頼山陽撰の墓碑銘で知られる人物である。また、丸山花街での面白い逸話も『蘭軒』の中で述べられている。

『蘭軒』の叙述の中で注目される人物は、唐通事・游龍梅泉である。鷗外は長崎の郷土史家・津田繁二に現地調査を依頼した。また、田能村竹田著「竹田荘師友画録」などを用いて、鮮やかな「游龍梅泉像」を描いている。但し、梅泉の子孫・游龍隆吉に面会しているのにもかかわらず、そのことについて述べていないのは、不思議であり、残念である。

以上のことは、平成28年7月発行の拙著『鷗外歴史文学続論』(梓書院)で、詳しく論述したので、お読み頂くと有難い。(本会協力会員)

○長崎経済研究所より「ながさき経済六月号」を受領、造船・高めの操業。機械・重電機械は堅調・電子部品は弱め。水産は取扱金額六四億、一%減。住宅建設は二ヶ月連続で下回る。公共工事請負金額減少。観光 主要施設、宿泊客ともに減少。雇用有効求人倍率 前年を上回二・三倍増。企業倒産・低水準。概況として月次県内経済は「横這い圏内ながら持ち直しの動き」とある。

○先年末、千葉市の水野幸一先生より、先生が昭和三十四年より長崎医大に在籍された十二年間に「市内・県内各地を撮影した写真があるので二冊に編めようか」と言われていたが、先日その写真集完成。ご寄贈いただいた。当時を物語る貴重な、そして今に 贖る写真集でした。(『長崎写録』長崎文献社刊・三、五〇〇円十税)

○多年、「長崎くんち」の事を研究してこられた土肥原弘久氏より前回の「長崎くんち―取材記録」に続き、先月発刊された『長崎くんちのしくみ』を戴く。「二人の氏子の立場から整理しました」とあり、大いに参考になりました。(ゆりり書房。千円十税)

長崎歴史文化協会 研究室  
TEL 八二二一―一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

